

平和の表象 — 日本占領期の北京における興亜美術展について —

きりん
漆 麟 (京都大学)

発表要旨

10
時
40
分
—
11
時
20
分松ヶ崎・東キャンパス内
60周年記念館
1F記念ホール

興亜美術展は日本占領期(1937-1945年)の北京で1939年から1944年まで毎年開催された大規模の官展であり、日中双方の美術家が多数関与していたものである。それは、戦時中の美術史または植民地美術の研究に値する重要な事象であるにもかかわらず、未だに考察されておらず、共通する性質をもつ鮮展・台展・満州展を扱う既往研究にも言及されていない。本研究は、興亜美術展の実像を考察し、同時期の外地で開催された官展と比較しながら、その性格および占領地での文化的・政治的な役割を検討するものである。

傀儡政権とみなされている華北政府が主催する官展として、興亜美術展は中華民国新民会中央総会または教育総署によって運営され、美術を通して中日満三国の親善・文化交流を促進し、東亜新秩序の建設に貢献することを目的に掲げていた。展覧会の審査陣には、北京および天津での日中双方の美術家がほぼ網羅され、出品ジャンルに応じて審査主任・審査委員・委員という三つの役職が設けられた。出品ジャンルは第一部の中国画(水墨画)・日本画、第二部の洋画、第三部の彫刻は一貫しており、第四部や第五部の工藝・図案・宣伝画などの類が開催年によって変更がみられる。出品作は中国画および洋画がその大半を占めていた。出品者の大半は中国人であり、齊白石・周肇祥・衛天霖・蔣兆和などの有名画家による委員出品のほか、主に若い世代の作品が展示されていた。日本側の出品は服部亮英・伊東哲などの委員出品を含めて洋画が中心となっていた。出品作に対して入選・奨励制度が設けられ、一部の作品の販売も行われていた。展覧会は北京の中心部にある中央公園または太廟にて開催され、多くの鑑賞者を迎えて美術界にとって盛大な行事であった、と当時の報道や美術批評が記している。

植民地の表象としての性格が色濃い台展や鮮展に比べて、興亜美術展は同じく母国の文化装置を移植した実践でありながらも、次の特徴が示すように、それらとは異なる性格を持っていたことが窺える。出品ジャンルには東洋画を設けず明確に第一部を中国画・日本画とし、北京で伝統が強い中国画の作品が最も多く、日本画がごく少数派で中国人によるものがほとんど見られない。審査陣は中国人が審査主任を務め、日本人審査員は日本画壇の権威者でないためか、副次的な存在であった。したがって、展覧会は日本画壇を追隨するものというよりも日中双方の画家が共演する場となっていたと思われる。また、宣伝画のジャンルがあるにもかかわらず、戦争や時局に関係しない風景画や肖像画が最も多く出品されていた。このように、興亜美術展は中国文化の中心地の一つである北京で開催され、中国固有の藝術を尊重するという一側面を持ち、平和の表象を表す日本側の文化政策方針に従い、政治的な隠喩を有しながらも没政治的な文化行事として仕立てられていたと考えられる。